

降り来て返り見すれば山深く夕べの色に静もりに梟

西芳寺(昔き)へ行く、京都の會員、笠鳴會の諸嬢も來會せらる、

來し方も又行く先も竹村のみどりの中に道の隠る、
竹村を出てむとするに水車物つく音の聞え來に梟
舊蹟と云ふがうるさし之無くば我が澄む心亂ざらむを
山本の主は老師とくつろきて日向ぼこりに我を待せり
雨の日に訪來ばいかに砌まで苔に埋もる苔寺の庭
み山めく心地こそすれ苔の上に這ひ廣ごれる日蔭の蔓
木の本の苔踏む路の軟かき其足ざはりけに心地よき
物ふりし御寺の縁の 日あたりに陰につどひて 酒人は

酒人どち 茶のみは茶のみどち 苔むせる庭をながめて

此の日暮しつ (長歌)

攝津の池田にもものして

津ノ國の箕ノ面の奥に池田人我を待つ今日ぞ歌無からめや
知恩院にて 仰ぎ見る伽藍の上の空高く眞白き雲の移ろひ行くも

ある朝 湯より出で、眺むる山の東山北山かけて霞なびけり

秋の空は流石に澄めど山續き花もふまむ景色也梟

二日三日經なば旅宿に移らむと思ひ居りしが終に御館に
面白く日數經る間に君が宿の庭の竹の子丈延にけり
歸らんとす
る日

(寒竹に類する竹にて紅葉を帯びたる筍、頗る美し)

○

同七年詠

早春詠める中に

木々はみな冬木ながらに何となく庭しめやかになりも行くかな

越生の梅見にまかりて

武藏野の遠野をよぎり我がこひし越生の梅を今日は見に行く
春の雪の残る麥生につゞきたる冬木ばやしに日かげたゞさす
さゝら唄今日は聞かむか山あひの越生の里の梅を見がてら
なに神をまつるなるらん小さな紙の幟立てり川のほとりに
崖のうへに家ひとつありて谷みづの浅瀬過ぎゆく音のさらく

九十七

打連れて思ひたちぬる山縣の梅見がへりは雪になりぬる

或る日

かつて我が土器を掘り得し片岡の畑のつゞきは家居になりぬ
岡ぞひの小田のなごりの草はらに水のながれて蛙住み居り
さと川のそのみなかみの草の原蓼紅反歸しゞに生ひたり
雨降らば沼ともならん草のはらかへる聞くにはよきところなる
沼なせるそのあたりに芦の生ひ浅きながらに水きよらなり
葦きりはをかしき鳥よかばかりのさゝやけき芦に来つゝ鳴くなり

夕立しける日

軒の樋の去年の落葉にうもるれや夕だつ雨の瀧なしてあふる

鹿澤温泉行

障る事ありて夏の央は過ぎつれど鹿澤の野邊の忘れ難く、岡刀目をいざなひ出でたつ、照子等は四五日後れて來る事となれり。今年は相憎く霧のみ深く近きあたりにだに遊びに行き得ざりしも雲霧の去來する高原の景色は亦捨難き味ひなりき。

曉淺間の東麓を越ゆ

尾根越すとむらがる雲を空高く吹きかへすなりあかつきの風

鹿澤の第一日 此日夕方雲晴れて満月皓々淺間の北麓より昇る

雲のかげむらく過ぐる阿豆摩耶の裾野の木原あかずも有かな
秋風になびき行けども谷間より湧くしら雲のつきむともなき
青雲に立てるいつかし神山の淺間みたけのみねのけぶりの
阿豆摩耶もとほつ白根も夕ぐものむかふす遠になりけるかな
一つ消え一つ消えして離れ雲そらに消えゆき月照りわたる

ほのくくと月夜に白く立つけぶり見つゝし居れば夢ごとちする

第二日 今日も天氣よし明日は阿豆摩耶山へ登らんなど若人等は云ふ、

年々に來ては聞けどもいつ來てもおもひなげなるうぐひすの聲
幸ありて今年も聞きぬ世に遠き淺間のすそのみやまうぐひす
北風の吹き上げ來れや遙なる谷川の瀬のおとの聞こゆる
谷水のほかに聲ありよく聞けば裾野を過ぐるあきかぜのこゑ
峠みち越え來し人かはるかなるすそ野の岡を馬二つ來る
籠をさげて草野を谷へおり行くは岩魚とりにと行くにやある蘭

第三日 雲霧深く折々村雨を交へていと寒し

霧ふかきこの日をさむみ衾のべ晝寢をすればこれもまたよき

あたゝかく袂かゝふり霧の日をうつら／＼と歌をしぞおもふ
綿入のぬのこかゝふり火に寄りて霧の一日を歌詠みくらす
たゝなはる山は見えずて日ねもすに霧のみまよふ野邊と成ぬる
やま風にうごきてやまぬ霧の間ゆむら／＼見ゆる野邊のやち草
霧ふかき今日とおもへどよそよりは雲居る山と人の見るらむ
さゝやけき野邊の木むらをつたひ來てま近きあたり鶯の鳴く
霧ふかき夕ぐれ時を思はせしあたりの景色さらに暮れ行く
霧ふかき軒のしづくのいつしかも小雨になりて夜のくだち行く
ふつ／＼と人のかたらふ聲をしも静けしとおもふ宿のよろしき
雨だりの板うつ音のしづかにも夜はふけにけりいざや寝なまし

第四日

空や／＼晴れざまなれど山の頂は皆雲にかくれたり

湯のやどの板屋の屋根の石くれの霧にぬれても夜は明にけり
この朝け晴れむけはひのほの／＼と白根の裾に見えそめにける
今日はしも晴れむとすらむ遙かにも見おろす山に日影さすなり
見はるかす向ひの裾の蕎麥ばたのしろきがよろし二まち三まち
こと問へば何か言へども云ふことのなかばはわかず草刈り男子
馬により歸りし行くは信濃路へ鳥居峠を越ゆとなるらむ

第五日

照子等來る空晴れなば三寶の池と云ふを見に行かむと馬など云ひ遣る

浅間嶺は昨日も見えず一昨日も今日も見えず晝いつ晴れむとか
草かげの湯川の煙ほの／＼と立てるが見えてあした寒しも

草野行く湯の川の邊の一本柳 秋風に靡く寂しも一本柳 (龍歌)
をりくゝに障子をゆする山かぜのさびしき音を今日も聞くかな
後れ來し子等も待ち得つ山のぼり明日は仕なむぞ雲早く晴れな
阿豆摩耶の山這ふ霧の裾野までかゝりて今日も暮れなむとする
南のかぜ雲吹きかへしおほ空に星のかけ見ゆ明日は晴れむか
吹きかはる強きみなみに嬉しくも廿日の月夜雲晴れむとす
みなみの風雲を拂ふとおもひきや夜半より雨をさそひ來にけり

第六日 今日も霧深くして晴れむともせずや、野分めきて雨降る

晴るゝよし霧もまたよし村雨の降るは降るにてこれもよろしき
霧もよし雨もよけれど良しと言ふ三寶の池を見ずやかへらむ

都への道は絶えなむあしびきの八重やまごもり雨しゝに降る
あしたより馬だに來ずて山の湯の今日を日ねもす雨のみぞふる
雨を寒み爐のもとにつどひつゝ都のはなしかたりあひつゝ

第七日 いつ迄待ちても晴るべくもあらねば照子等を残し

て岡刀目と共に歸路に就く、鳥居峠の道は自動車の通はぬ所あれば元
來し道をとる、一度燐懸に下り又山越して輕井澤に到る、山越の道に
て深き雲霧に會へるが面白かりき、

斯くばかり登り居しとは知らざりき鹿澤は雲にかくろひにけり
秋ぐさの花を見るくゝ行く路のいつしか雲の中になりぬる
はるかにも見おろす谷に草野ありて霧のまよふ中に月見草咲く
霧のそこに果の知られず下り行く落葉松ばやしものすどきかな

我が過る添のなだりの霧の底に消え行ける見ればそゞろ寒しも

岡刀自より「心ざす道の彼岸の遠きかもはや一年の今日

になりぬる」と云ひおこせ給ひければ

心ざす道の彼岸はおもしろし行けば行くほど遠くなるもの
その奥に又彼岸あり其の奥に又彼岸ありてはての知られぬ
道の彼岸まことは在らで面影に立てるのみなれば限なく遠し

或る友の家にて歌のつどひしける折（主人無聲不在なりき）

外に出てゝあるじのまさぬ家に來て歌詠み合ふも心あへばぞ
曇れども雨にもならずまくなぎのうすづく見えて日の暮むとす
人の聲もの打つおとも聞ゆれど秋のこゝろはしづけかりけり

夕餉にととろゝやつくる播ばちに物する音のしきりに聞ゆ
文机に置きたる鉢の春蘭のみどり濃くして葉のほそきよし

京都より歸りて後津田主よりくさぐさの歌給はりければ

高麗劔我が訪ひぬるを然かばかりおぼしめしゝかいとも嬉しも
あひともにうたひ交はさむ天地のめぐみの露に身のひたるべく

又其後主の歌に「只一人火桶により居何となく友のこほ

しき今日にもあるかな」とあるを見て

只一人火桶によりて居ますとか近くしあらば訪ひもゆかむを
鐵鉢を机に置いてゆるくと葉巻くゆらす君をおもふかな
何ごとか調べんと云ひて歸り來し言葉のありしが何なりけむか

秋の末の歌

いとはやも小鴨ぞ越ゆるみづうみの入江ほどなき山のはなはを

初冬見る所を

この冬のはつ雪ならし薄雪をかづきて近き秩父やまなみ

歳の暮に

町の男の子年木立てむと打つ槌のいとなげなるもこゝちよき哉

明治神宮献詠

東の國のしづめと皇國をはぐみましあはれ大君はも

若き頃の思ひ出

何ごとの思ひもなくて過ぎにける頃をしおもへば若かゝりし哉

これと言ふ憂きこともなく過ぎにける我がこしかたは幸かはた

折にふれて

この山は、たして歌の中山かさだかならねどひた登るなり

迷路

斯く行かば斯く行かれむとおほろかに思ひしことぞ惑ひ成ける
近路をとらむと思ふこゝろより悔いてかへらぬ路に來にけり
違へたる道と知るく遠くとも行き得む路としひて來にける
別れ路をたがへし事を知りし時引きもかへさばよかりしものを

初めて齒のぬけたる時

親無しに生ひ出でにける親不知四十とせあまり我れにつかへき

初めても落ちし齒なれば何となく別れがたなきおもひせらるゝ

思ふことありて

鉢の木の枝張り根張るいきほひに鉢を割らんとすはや移してな
ひた土に植ゑむ木なれどすべなくば大きな鉢にしばし移さな
かぎりある鉢には堪へじ末つひに土におろさむ大木ならまし
末つひに鉢にし堪へぬものならばむしろいまより土におろさな

折にふれて

何ゆゑか庭の梅の木ほづ枝はも若芽のふかず枯れなむとする
よく思へばはびこる枝にまかせ置きてつちかはざりし報い也梟
枝先の枯るゝは末ぞ本つ根に朽ちし所のあるにやあるらむ

朽ちし根をことごとく切りて枝も切りよくつちかはむ惜き此梅

五月十五日重大事件勃發す

斯ること有らむとかねて恐れ居し事のまさしく現はれきたる
かゝる時死なむ命はこれもそも皆光りある眞玉なるものを
光りある玉はくだけで石瓦さはなる思へばさびしかりけり
あまりにもはやる心にはやり男の惜き大木を倒しつるかな
かゝる時御代のためにし我がならばいかにうれしき命ならまし
光り有る玉に生れ得ずくやくも我れ瓦としようまれ來にける
草の實の稗といへども世にありて人の命をつながしむるもの
米にしかず粟にもしかず一粒のさゝやけき稗になほしかずけり

しまき立つ吹雪の雲の南にうつりてすごくなりけるかな
しまき立つ吹雪の雲を吹き散らす神風すごくなりも行くかな
世を救ふ神かぜとしも知らざるかうたてき者よ四方のやつこ等
何のために吹く神風と知らずして神の心をうたがふやなに
まがつもの畏こまむ日を終りにて吹きをさまらむ風と知らずや

滿洲國成立

北の野は雪のしたより草の芽の延び立たむとし風はなごめり
おのづから延びむ力に延び行くを霜も吹雪も留むすべあらむや
いまだしも世に無きばかり安らけく樂しき國をきづきあげてな

たぐひなく樂しくあらばおのづから人は寄り來む世を安國と
砂の海の外の蒙古もほどこかきチャハルも來れ善き國いで來つ
國ながら民も寄り來て廣がるがこれぞまことの神のみこゝろ
かゝる國を作りあげむは我國の力なりけり神のみこゝろ

滿洲國承認の日

すごしもよ我が大船は黒潮のうづまくなかに乗りいでにけり
いかばかり荒れに荒るとも波の底を潜らむ迄も乗りぬかてやは
帆柱も或は折れむ折れぬとも乗りいでし船をなか止めむ
御民我等今日に逢ひにけり日の本の御民の我等今日に逢にけり
輕々しく云ふべきならねど今は言はむ今日あるが爲めの大和魂

又

我が國は斯く行くべきを行かざりし報いに斯くも苦しく成けむ
我が國の行くべき道のひらけ來ぬ苦しきことは同じなれども
希望ありて苦しきこと、希望なくて苦しき事は比ぶべくも有ず
我が國に人は有りけり有り難き人は在りけりいざとしなれば
我が國は神ながらなる大君のすべます國ぞならびなき國ぞ

中西ます子刀自逝かる

昨日より堪へ來し涙せまり來て終にえ堪へず外に出で、泣く
すべなしと思ひは思へど夜になれば思ひ出していを寝かねける

○

春の歌の中に

同八年詠

あづさ弓はるを寒しとこもる間に軒端の梅は咲きにけらずや
草掘りに君行かさずやかたかこもゑぐも有りと言ふ戸田の邊へ

は、ぐり (貝母) (産歌及短歌)

嬉しくも咲にけるかも貝母の花 嬉敷も咲きにけるかも貝母の花
は、ぐりはめぐしうつくし瘦々に咲きたる花をなにか言はむ

澁井永壽ぬしが信州白骨温泉より「が、芋」の根を掘り
來つる由聞きて

が、芋はめぐらしきもの其の芋の小芋いでこば我にも分けさせ

夏の歌の中に

あかつきの色になりゆく野末よりすゞしくのぼる有明の月
風きよき暁がたのすゞしさは夏よりほかに知らぬなりけり

初秋の歌

はつ秋のすがくしもよ風きよきこの朝かげのこぼろぎのこゑ

佐々木錦嶺氏へ節黒剪夏羅せくろあなろの根分に添へて (鹿歌)

野邊にして 我が掘り得つるせんうの花 一本は君にさゝげむ

二本得しもの

岡刀自へ参らせたる鹿澤より採り來し草の事を思ひ出で、 (同)

彼の草は花にやなりし思ひ出の草 彼の野邊ゆ掘りてさゝげし名

無しぐさの花

栗を

夜べの風に落ちし落栗はや取り來山のねずみの喰はぬその間に

暮秋の歌

秋ふかき枯野の末の古寺に時雨のあめを聴かむ夜もがも

初冬郊外所見

日にうとき森の脊面の葱畑のうす霜見れば冬にしありけり

冬の歌

植ゑおける草の古根にあたゝけく落葉かづけて冬がこひせむ

庭の蜜柑を

庭の蜜柑霜よけもせて此の冬の寒さ越さすがいとほしきかな
あまりにも大きくなりて霜よけもかけむよしなし寒くし有る蘭
去年の實は霜に堪へてや落ちぬれど一昨年の實の一つ残れり
三年ごし残れるからに此の一つ取りもかねけり靈こもるがに
かくしあらば木の疲れなむ他木より肥料よくせむ愛しき此木に
斯てしも四年五年落ちざらば木の實といへど何ごちせむ

或る夜

この夜らや袖べし作らむ埋火の灰かきおこし炭團つぎてな

折にふれて (長歌)

心合ふ友はをかしも 彼れ言へば我れも言ひ 我れ言へば彼れも

言ひ いれひもの同じこゝろに 同じ事あげつらひつゝ 同じこ
と言ひはゆけども あやしもよ飽くこと知らず 冬の夜の寒き夜
すらの 霜こほる長き長夜も うづみ火の絶えけく知らに 同じ
ことくりかへしつゝ語り更すも
上つ代の事を語り居れば天ぐものそきへに遠く心はゆくも

昭和八年十二月廿三日 皇太子御降誕あらせらる

今日しもあれませる皇子や

畏し日つぎの皇子

天の下照り足はし

天地にい照りとほらなむ

高ひかる日の皇子ぞ

朝日の日照る皇子ぞ

天つ日の日嗣の皇子ぞ

同

うまし國我が日の本は 朝日の日照る國 陽炎の日の出づる國

今日あれし此大皇子の 天の下知らさむ頃を 命ありて仰ぎ見か

ほし 山祇は贄たてまつり 野槌も贄奉り 和田津見も贄たてま

つり 海山のありとある神 鶉じものうなねつきぬき しゝじ物

膝折りふせて 西東寄り仕へ來むぞ 日の本は國の眞ほろば 朝

日の日照る國 かぎろひの日出づる國ぞ

東の國の眞ほらに眞かゞやく日の大皇子はあれましにけり

朝日子のかゞやき昇る御光りにうまし國內ぞとよめき渡る

或日浴後机に寄りて山地の温泉の事など思ひ續け、る折
出て來し歌

秋の日の暮るゝに早き谷かげの板屋さびしきともし火のかげ
いと早も日かげかげろひ温泉の宿のうたゝ寝さむき岨の山かぜ
見はるかす裾野の尾根をつぎくになだれて越ゆる雲のかげ哉
大空にかべ立ちつゞく高嶺小根今日も日ねもす雲の越ゆるなる
夕づく日山にかくれて谷深くたゞよふ雲のいろのしづけさ
山の上はまだ暮れねども夕もやの底につらなる里の家むら
くれなるに片ほ照らして足びきの山をはなるゝ今朝のあさ雲

期と言ふことを

期は來り期は行くものその期しあだに過さば二度は來じ
期の來て前を過ぎてても大かたは心おくれてとらへ得ぬもの
我れとても時の來し事も有りつらめ物うとければ過し遣りつれ

折にふれて

心から道ふむ人のそこらくに出で來ば道はひらけなむものを
心から道踏む人の少なきは我が思ふ道のたがへるにはあらぬか
吾はもよ道は之れぞと思へども餘所より見ればさて如何有らむ

話と心

他人の心他人の心に我れなりて聞かば聞き得む他人の誠も
うはべのみ早分りするその人は底のこゝろぞ終に聞き得ぬ

うはべはさもあらばあれ話にも底のこゝろを聞くべかりけり
己がこゝろ無みして聞かずば人言のまこと心は聞き得ざるべし
己がこゝろ無みして聞くは我が心人のこゝろをさへぎらぬため
村ぎもの心しづめてよく聞かばいかなる人も善きところあり
心ごゝろ心たがへば悉く我れに合はむはけだし有らずけり
合はざるは合はざるにして合ふ所良く知り合ふが宜しかる可き
我が心ひろくなるなべ人ごころ合ふこと多くなるものにこそ
我がこゝろ聴しとおもふ心こそ事を聞き得ぬこゝろなりけれ

腹を痛めける頃

腹の力抜けてはさびし此の力あらずは我れの何ものも無き

ともすれば抜け去る奇しも此力我が物にして我が物にあらず
天地ゆたばりし力此のちから臍の下にし早くかへりませ
すこしづゝ歸りし來ます腹の力我がものならねば尊くぞおもふ
落ちつきていませ御佛我が佛歸らしましぬありがたきかな

右の歌に就て津田ぬしより歌あまた給ひし中に「歸り來
し腹の力を嚴かに尊みますが尊きろかも」とありければ

彼の歌を只一とわたり聞く人はをどけし歌と見てや過ぎなん

折にふれて

何事か爲さむとおもふ心しも我れを活かさむ心なるらむ
今ゆ後十年生きても何事を爲し得む我と思はざれども

廿年と云ひても寂しおもふ事爲さむ事のみ我れは思はなむ
腹の力まだかひなしやバカくしつまらぬ事を折々おもふ

國際聯盟脱退

今こそあれ四方の國皆このかみと皇國を頼むときの來なむぞ

明治年間の一部

日露戦役

岡崎生三(高直)將軍が越後の兵を率て九連城に先登し給ひぬと聞て

つはものが人なみ越しのはたらきも情にあつき君あればこそ

遼陽攻撃の際黒木軍が左方に轉じて敵の側背を突き大勝
の源をなせる由聞きて(岡崎將軍は黒木軍の旅團長なり)

横ざまに道ふみかへて突きくづす我が右の手に堪へずや有けむ

岡崎將軍が廣島に後送せらるゝ由の豫告を見て

(御病氣の爲なりし由後にて知れり)

いくそ度あらため見ても手を負ひし人の其名は君にぞありける

奉天戦に於て今橋知勝將軍が負傷し給ひし由承りて大に
心を傷め居しが其後御自筆の消息を得て

やうやくに胸はおち居ぬ水莖のとゞこほりなきこのたまづさに

岡崎將軍が再征の途に上り給ふ由承りて曩の「思ひかね
枕刀を取出で、振り試むる折も有見」と云ふ御歌を思ひ
出で、

ひめ置きし枕刀も時を得て世にいづる今日やうれしかるらむ

奉天の北方に我軍敵の主力を包圍せりと聞きて

益良雄が張りわたしたる大綱にかゝれる鯨のがさずもがな

日本海々戦

ちはやぶる神のいぶきにかゝりてはのがるゝ艦の一つだに無き

軍艦初瀬と共に旅順口外にて戦没せし海軍少機關士山下重
考君の遺家をとぶらひて (長歌)

大君の遠の守りと 出でたゝし倒れぬる君 國の爲めたてし功績
は 千萬の後の世までも 天照るや日月のごと とことはに消ゆ
る日あらじと 雄々しくも口には云へど 人の親の心思へば あ
ふれ來て流るゝ涙とゞめかねつも

父の身まかりける時

張りつめし心くづほれ訪ふ人の顔見るやがてむせかへりぬる
たゞならぬ人のなげきに我れのみ親ならぬごとと思ひなされつ

喪にこもりける時

むらぎもの心みだれて此の歎きまぎらすすべと思ひけるはや

母の身まかりける時

妻子等の心おもひて男の子我れ泣かじと堪ふる胸のうちはも
やすらかに眠りまし、は此の上のなげきかけじの心なりけむ
おもふ事十がひとつもなし得ずて又母にしもわかれぬるかな
數ならぬ我をたのみて思ひ残す事のなげにもねぶりましぬる
廣かりしは、その蔭をつくくとしのぶ身にしもなりにける哉

(右五首は大正元年十二月の詠なれど哀傷歌なれば此所にくり上ぐ)

明治四十五年七月廿六日 聖上御懷益々重らせ給へる由
承り憂懼に堪へず謹で一夜百首を詠じ神明の加護を奉祈
歌の中より

晴れくもる天津日かげに世の中の蒼人ぐさは生けりともなし
御ありさま告げ來る鈴の鳴るにつけ鳴らぬにつけて胸ぞ傷むる
危かる七日ばかりの一と時に過ぎよとぞ思ふ七日ばかりの
此の願ひかなはさせ給へ天つ神わたくしごとはさらに祈らじ
かばかりに開けし御代も御命にかはりまつらむすべしもぞ無き
事しあらば身もたなしらぬ益良雄もせん術をなみ泣つゝぞ居る
みいたづきよし重くとも大君は神にしませばおこたりぬべし

何事もわかぬ子等まで親の顔うちまもりつゝ浮きたちもせず
物の音の何も聞えず小夜中と夜はふけにけり神まうてせむ
さはるべき物の音もなき小夜なかに心ゆくまで神にいのりつ
みやしろにぬかづき居ればいを寝ざるおなじ思ひの人ぞ詣來る
世の中に苦しきことは多けれど今日の今宵にしく時あらめや
ありとある人の力と神わざとあはさん時に又なりにけり
國民のうれたむ今日のありさまを聞えあぐべき時よはや來ね
わたくしのことにはあらず天地を動かしぬべき歌のいでこよ
大内を思ひまつれば床の上にやすいせられむ今日の今宵か
國たみの力及ばぬこのときし神の御稜威はあらはれぬべし

すごかりし往來の雲のひまとめて嬉しく月はかゝやきにけり
伊勢の宮鹿島香取と神々のいますかたへと行くこゝろかな
夜も明けば御ありさまをも知られむになど東のしらまざるらん
あかつきの庭におりたち東ををろがみ居れば雞が音聞こゆ
雨雲も終にしぞきてあかつきの色見えそめぬうれしくもあるか
東のみ空かゝやき神かけて祈りししるしありげなるかな
雲の上の大みけしきはわかねどもとにもかくにも此夜は明けぬ
廿八日皇宮前にまかりて
かゝる時いまはしと思へど湧き出でゝせむすべもなき我が涙哉

我が心吾とはげます歌をだに詠み得ぬまでにこゝろ亂れつ
我が心いためつくして畏くもおそろしき夜は明けはてにけり

卅日曉終に御登遐あらせ給ふ

ふれ文を手に取りしかど胸せまり讀むにえ堪へず見るに得堪へず
いにしへの書に見てだにゆゝしかる其世のさまに遇へる今日哉
大君のとゞまりまさぬものならば世も斯くながら絶えよと思ひし

八月五日の夜おほけなくも殯宮を夢見奉りて

はしたなく人に言はむもおほけなく事のかしこき夜べの夢はも

九月十三日の夜御大葬を拜し奉りて

態かへし大御車のいでましの悲しき今日になりけるかな

はるかにも砲の音すなり春秋になれし宮居をはなれますらむ
海行かば水漬くかばねとちかひてし伴の男あはれ御先つかふる
はふりおつる涙のうち御車をたゞ夢のごと送りまつりぬ
今となり見れども見えずふたゞびは拜むすべなきおほ御車の

先帝の御製を拜して

我等だにうとき縣の朝夕をいつの折りにか見そなはしけむ
世の中のまことの道とのらしゝにはぢぬ歌びと幾人かある

其 後

新世につかへむ我等かなしみにくづほれてのみあらじと思へど

乃木大將夫妻殉死せらる

御あとをと思ひ定めしその時のこゝろやいかにかさやけかりけむ
眞ごゝろよけに眞心よたぐひなき心持たしゝ君にもあるかな
君により世の人みなも皇國のもとの心に立ちかへりなむ
ものゝべの伴ばかりかは世の人も君によりてぞよみがへるべき
眞ごゝろを持たぬやつこに神とます君がこころの何に知られむ

(明治天皇御登遐以降は大正元年のものなれど哀傷歌なれば大正の初頭に掲げむも如何と思ひ、明治の終りに載す)

歌集の終りに

古來日本三景として、松島、天橋立、嚴島を稱へこれを觀賞すれば、風騷の士も満足し來りき。今交通の便宜に依り發見せられたる景勝を、新十景と謂ひ又國立公園として選定せらるゝに、この三景を除外せり。これ實に就き影を避けたるに類す。歌人としてその在世中顯はれずして死後漸く認められし人に、宗武、良寛、元義、曙覽、言道、望東尼あり。近く天田愚菴師が識者に認められ來るあり、我が師笹村良昌翁の如き、顯はるべくして顯はれざる其の一人なり。この景勝の問題と、この歌人の事態とを對照し來れば、理義の脈絡通ずるものあ

るの興味を覺ゆ。尙資格ありて顯はれざる歌人の僕指すべく、顯はるゝと顯はれざるとは其の實質には何等關與なしと雖も、資格ありて顯はれざるは惜むべしとす。吾が師翁の嗣良水大人の歌集を公刊せらるゝあり、これは顯はるべきものゝ顯はれむとするなり。輓近日本精神復興の氣運に際し、神隨の道として國歌の日に隆ならむとするは、欣懷に堪へずと雖も、眞歌を詠み得る人は、曉天の星の如く寥々たり。古語に「僅に義理に涉れば天地の感を塞ぐ」と言へり。この點に於て萬葉の眞髓を極め、更に記紀の精神を體得し、恒に義理に涉らざらむとし、天地の感を闡かむとするに精進せらるゝ良水大人の此の歌集の、歌海の羅針盤としての價值あるを、推稱大呼するものは、言の葉の友の一人なる下村關路とす。

昭和十年五月廿五日印刷
昭和十年五月廿九日發行

定價 參圓五拾錢

著者	東京市目黒區下目黒四丁目九四七番地 笹村 鐵 熊
發行者	東京市目黒區上目黒五丁目二四七三番地 萩谷 連 四 郎
印刷者	東京市本所區麻橋一丁目二七番地ノ二 守 岡 功
印刷所	東京市本所區麻橋一丁目二七番地ノ二 凸版印刷株式會社本所分工場
發行所	東京市麻布區飯倉片町二七番地 關 幽 會

終

